

### 317) 恐喝

彼はなぜか酒を飲むと、とても雄弁になるばかりか、一晩眠るとその日に喋ったことをすべて忘れてしまう。時には便利な、また時にはやっかいなタイプの男である。

彼の家はかれこれ会社から一時間はかかったのと、酒を飲むといつも決まって終電に乗り遅れて、小生のアパートに転がり込んで来る。当時小生の安アパートは会社に近い下町にあったから、そんなときは翌日は必ず彼が会社までのタクシー代を奢ってくれて、結構小生もその恩恵にあずかっていた。ところが或る日酔った勢いで彼が言うには、「昨日オレさー受付の香ちゃんに白金懐炉プレゼントしちゃった。だって受付ってすごく寒くてさー、冷え性になっちゃうじゃない。」と、うれしそうに言うのである。へーこいつは香ちゃんがタイプなんだと思いつつ、翌日「それで、香ちゃんは白金懐炉をちゃんと使ってるのかね～」と冷やかし半分に言うと、「えっ、君、どうしてそのこと知ってるの！それ絶対秘密だからね～。でも、どうして知ってるの～？」「バッカだな～、オレの地獄耳、おまえ知らなかったのかよ～」と、まあこんな会話が続いて、我輩は彼を脅しつつ、毎日昼飯をご馳走になっていたのであります。ついでに言えば彼は香ちゃんとは結婚することはできなくて、結局淑子ちゃんと結婚したのですが、今では淑子ちゃんと幸せにやっているようであります。